てんこもり

“米づくり”苦労も楽しみも 心の糧になれ

地元の小学校に学習田を ～地域住民の奮闘～

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、学習田の代わりにバケツ田んぼで米づくりを体験

学習田で稲刈りを楽しむ児童（昨年の写真）

バケツ田んぼにも実りの秋

田植えでは泥田の感触を体験

守山市の基本理念は「のどかな田園都市」です。
この基本理念にふさわしく、市内ほとんどの小学校にはそれぞれ学習田があって、児童がお米の栽培を体験しています。
しかし、実は立入が丘小学校に学習田が復活したのは3年前のこと。
今回は地元の小学校に学習田を復活させようと奮闘した、
地域住民の八尋（やひろ） 由佳（ゆか）さんと奥村（おくむら） 喜三郎（きさぶろう）さんを取材しました。

地元の小学校に学習田を 地域住民と学校の熱意

13年前に立入町に引っ越してきた八尋さんの子どもが通い始めたころ、立入が丘小学校には学習田がありませんでした。当時は気にしていませんでしたが、ゆりかご水田のサポーターに取り組んで、1年間お米づくりを経験したことで「地元の小学校に学習田を」という思いが強くなりました。

八尋さんが、その思いを学校に伝えたところ、学習田は10年以上前になくなってしまったと聞きました。教師も「お米の一生を五感で学ぶ体験は、子どもにとって貴重な経験になる」と、一緒に学習田復活に向けて動き始めることになりました。

八尋さんと小学校の熱心な説得の末、地元農家の奥村 喜三郎さんの協力で、立入が丘小学校の学習田は復活を果たしました。

動き出した学習田 市街地に作る難しさ

住宅が増えて農地が少なくなった立入が丘小学校区での学習田復活は簡単ではありません。学習田には、子どもたちが昔ながらの田植えや刈取りなどの体験を通して、米づくりの苦労や命の大切さ、お米の一生など多くのことを学ぶ目的があります。

子どもたちが米栽培を体験する準備、指導、育生管理など学習田（農地）を所有する農家に多くの負担がかかるうえ、米の収穫量も減ってしまいます。学習田復活を実現するには、農地を所有する人の理解と協力が必要でした。

八尋さんと学校の呼び掛けに、宅地になる予定の田んぼをひとまず使わせてもらえることになりました。そうして平成30年、5年生児童が10数年ぶりに復活した学習田で米の栽培を体験しました。

学習田に響く歓声と笑顔 地域に元気をくれた

農地の所有者に負担を掛けすぎないように、復活した学習田には、大勢の大人が関わってくれました。自治会や児童の保護者、JAおうみ富士守山営農センター、地主以外の地元農家も手伝いに来てくれました。

その中に、奥村 喜三郎さんの姿もありました。奥村さんは、担い手に預けずに米栽培をしている数少ない地元農家です。農機具もノウハウも持っています。しかし、現役農家だからこそ、学習田の苦労と大変さを誰より分かっていました。

そのため、八尋さんから協力を依頼された当初は断っていました。手伝いで行った学習田で、田植えや秋の刈り取り、歓声を上げながら汗を流す子どもたちの姿が、地域に元気を与えてくれるのを見ていました。子どもたちの笑顔をその目で見て、八尋さんと小学校の熱心な説得に応えて学習田を提供し、全力でサポートしていく決意をしました。

米づくりの体験を通して 将来の子どもたちに夢を

新型コロナウイルス感染症の影響を受けた今年、児童はバケツ田を代用に米づくりを体験しました。

奥村さんは「1年をかけて米を作る体験で〝育てる〟を知り、多くの生き物にも触れ合える。それは、子どもたちの将来にも、何かの助けになると思いました。私の田んぼも、いつか宅地になってしまうかもしれないけれど、10年は頑張りたいと思っています」と話していました。

八尋さんは「ゆりかご水田の手伝いで農業の楽しさを知ると同時に、この経験が将来、子どもたちの選択肢を広げるかもしれないと思っています。奥村さんと一緒に米づくりの裏作まで子どもたちに体験させてあげたいと、夢は広がっています」と話していました。

米づくりの学習を支える地元農家の奥村 喜三郎さん（右）
学習田をコーディネートした地元住民の八尋 由佳さん